2002-10

札響くらぶ

第22号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

札響物語　～臨時特別篇～

直純さん逝去

６月19日朝、岩城宏之さんと電話中に、岩城さんの方に割り込み電話がかかって来た。「ちょっと待ってて」と、しばらく待たされた後、「ゆうべ、直純が亡くなってね、葬儀委員長を引き受けることにしました」と言われた。

告別式は、東京青山の斎場で６月23日に行なわれた。1998年に洗礼を受けてクリスチャン・ネームは“フランシスコ山本直純”だった。一面菊で飾られた祭壇の中央には、黒枠の右肩に花飾りをつけた大きな遺影、すぐ下には菊の花で作られた十字架、左右には、皇族からのお花がさりげなく飾られていた。また、指揮棒と五線紙、眼鏡と帽子など愛用の品々が、十字架の下に置かれていた。立派なお棺の中のお顔も拝見した。安らかな、きれいなお顔だった。

直純さんとは、５月29日の「札響名曲コンサート」のゲネ・プロの最中に、楽屋でお目にかかった。札響くらぶの総会の日だった。既に体調が悪かったのか練習は副指揮者にまかせて、休憩中だった。「ちょっと用があって、本番は聴けないんですが」「ゲネ・プロ聴いてくれる」。ご本人は一休みのつもりだったが、そのまま休んで、演奏会の前半を振られたそうだった。

「これから札響くらぶの総会がありますので」と話すと、「札響くらぶに、おれでなにか役に立てることないかな。例えば顧問になって何かするとか」「ありがとうございます、総会の席で皆さんにお伝えします。札響くらぶの会員は本番を聴かせていただきます。よろしくおねがいします」とお別れした。

翌日帰京し、31日に世田谷の砧（きぬた）で指揮されたのが最後だった。享年69歳。

直純さんは「男はつらいよ」などの映画の音楽を作曲することで、庶民派の作曲家と知られていたが、札響も出演したことのあるテレビ番組「オーケストラがやって来た」で、一躍大衆の知る指揮者になった。

道内各地からも、町の記念になる札響コンサートにはぜひ山本先生でと声が掛かった。サービス精神が旺盛で、どのコンサートも大変な受けようだった。

ご本人は寂しがり屋で、酒が好きだったため、各地の担当者は、終演後深夜までの付き合いで、様々な思い出を作られたことと思う。

直純さん自身が忘れられないのは、札響の首席ファゴット奏者だった故戸沢宗雄氏の家で酔っ払って気持ち良くなり、二階から飛び降り「気が付いたら足を折っててよお」と困惑していたのと、八雲町での演奏会の時「ぼっちゃん大きくなられて」と乳母さんが現れたことのようだった。

ご冥福をお祈りします。

（竹津宜男）

４・５ページ、追悼特集です。ご覧下さい。

コンマスに聞く

とにかく大自然 北海道に感動!!

田島 高宏 さん（たじま たかひろ）

札幌交響楽団
コンサートマスター

田島高宏さんのプロフィール

4歳よりヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科（男女共学）を経て、桐朋学園大学を卒業。第49回全日本学生コンクールにて奨励賞受賞。1997年水戸芸術館にて「茨城の名手たち」に出演。1998年ヴィオラ奏者としてJTアートホールにおけるアフタヌーンコンサートに出演。2000年よこすかベイサイドポケット音楽コンクール弦楽器部門第2位に入賞。第10回日本室内楽コンクール第2位入賞。2001年12月桃華楽堂にて御前演奏を行なう。2001年4月より札幌交響楽団コンサートマスターに就任。

これまでに、伝田充正、大図美千恵、西田和弘、安西爽子、宗倫匡、イフラ・ニーマン、和波孝禧の各氏に師事。

コンサートマスターに就任して1年半近く経過した田島さんに、8・9月はサイトウキネンなどのため不在とのことですので、7月24日にお話をうかがいました。

―― コンマスになって約1年半、これまでを振り返っていかがですか。

田島 ほとんどが初めて演奏する曲ですから、曲の勉強だけで一杯一杯という感じです。責任ある立場にあることを自覚し、その心構えを持つことの大変さを実感しています。何よりも、寝たい時に寝、休みたい時に休むというような学生時代の生活を、社会人としての生活に習慣化し直すのが大変でした。

―― コンマスに就任するに至った経緯はどんなことだったのでしょうか。

田島 大学4年の4月か5月頃だったと思いますが、コイン・ランドリーに洗濯に行っていたら、突然円光寺さんから電話がありました。全然面識はなかったのですが「コンマスをやってみませんか」というお話でした。言われるままにその後円光寺さんのお宅に伺い、尾高さんとお二人の前でブラームスのコンチェルトなどを聴いていただき、尾高さんに「やってくれませんか」と言われ、お引き受けすることになりました。

後で聞いたところでは、当時、尾高さんがニキティンさんの後任を探しており、私の主任教授だった原田幸一郎先生や、藤原浜雄、店村眞積、毛利伯郎の各先生や小森谷巧さんなどが推薦して下さったようです。

―― 札響に入団してみて、札響というオケをどう感じていますか。

田島 時々、すごい音を出すオケだなと驚かされます。自分の責任もありますが、常にそんな音を出せるオケになれればと思っています。

―― ヴァイオリンとの出会いは、どんなことだったのですか。

田島 今でもはっきり覚えていますが、4歳の時に、当時長野市に住んでいたのですが、母と街を歩いていた時に母が「ヴァイオリンやってみない」と聞いたんです。「うん」と答えたら、そのまま音楽教室に連れていかれました。両親ともクラシックが好きで、私に楽器をやらせたいと思っていたようです。

―― 本格的に音楽をやろうと決めたのはいつですか。

田島 中2の時です。きっかけは2つありましたが、1つは、練習なんかしないで皆と同じように遊びたい、なんて思っていた時に母が小澤征爾さんの「僕の音楽武者修行」を「読ん

でごらん」と言い、あまり読書などはしなかったのですが、読み始めてすぐに夢中になりぐんぐんとクラシックの世界に引き込まれました。その年にちょうどサイトウキネンが始まって、テープを聴きまくったり、ビデオを見まくったりしました。

もう１つは、中１から桐朋の夏期講習に行くようになりましたが、周りとのレベルの違い、自分の勉強不足に愕然としました。中２の時に和波孝禧先生のレッスンを受け、11月から先生の家に通うことになりました。その時に決心が固まりました。高校から桐朋に入り、７年間東京で一人暮らしをしました。

―― 最初からオケを希望していたのですか。

田島　アンサンブルが大好きですから、いつかはオケにと思っていましたが、ソロで少し活動してから、という程度に考えていて、まさかすぐにオケに入るとは思ってもいませんでした。

―― 思い出に残る演奏はありますか。

田島　これも２つあります。大学２年の時に、別府アルゲリッチ音楽祭に桐朋の学生オケが招かれ、チョン・ミョンフンさんの指揮、アルゲリッチさんのソロでプロコフィエフのピアノコンチェルト、ブラームスの交響曲第１番を演奏しました。世界のスーパースター二人と共演でき、熱気にあふれて、あれほどの集中力をもって演奏したことはありませんでした。本当に夢のようでした。

もう１つは、大学３年の時に日本音楽コンクールに出ました。全然自信はなく、１次から３次までの予選があるのですが、２次の時に駄目だと思って学校に戻り、屋上で友達とアイスクリームを食べていたら、和波先生から電話で「通ったからすぐ来なさい」と言われました。３次はバッハの「パルティータ」で、慌てて24時間ぶっ通しの徹夜で暗譜して臨み、全曲を目を閉じて、忘れないようにして弾き通しました。弾き終って、目を開けたら目の前にコンクールの看板がありました。気付かずにずっと後ろ向きで弾いていたんです。会場は大爆笑で、成績も何もありませんでした。審査員の徳永二男さんには「君、良かったよ」と冷やかされ、和波先生には「気付かなかったのは、君と僕だけだね」というきつい一言をいただきました。

―― ところで、何か趣味はお持ちですか。

田島　これを言うと母に怒られるのですが、プロレスの観戦が大好きなのです。あとは旅行、特に鉄道旅行が好きです。北欧やアフリカのサバンナなどの大自然にふれてみたいと思っています。いつか、シベリア鉄道でロシア横断の旅をしてみたい、なんて夢見ています。

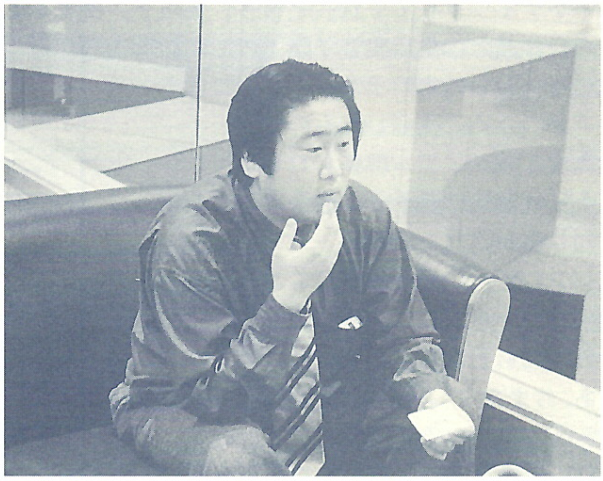
―― 音楽に関しての夢はどうですか。

田島　基本的には、多くの、いろいろな音楽家と一緒に演奏できたらと思います。

具体的なものは何もないのですが、ヨーロッパで、その土地に暮らして、音楽をやれればいいな、という気持ちはあります。実際に住んだことはありませんし、夢と現実は違うかもしれませんが、目下のところは私の夢です。

―― 北海道に暮らしてみての印象はいかがですか。

田島　とにかく「大自然だ！」という感じです。長野も自然豊かなどと言われますが、まるでスケールが違います。いたる所で原生林のよ



うな光景が見られますし、自然派の私にとっては感動ものです。でも、その自然の厳しさも実感させられます。冬に岩見沢から戻ってくる時に、猛吹雪に遭遇し、視界がほとんどゼロの状態で、車に乗せていただいていたのですが生きた心地がしませんでした。去年の２月に来た時には、マイナス14度の中で雪祭りをやっていて、びっくりしました。街の中を歩いていて、顔が凍るような思いをしたのは初めての経験でした。この冬には釧路湿原に行って、大自然の中に自分一人という、怖いほどの貴重な体験をし、心から感動しました。

―― 最後に、札響くらぶの印象をお聞かせ下さい。

田島　私達は演奏前後の拍手で勇気づけられ、喜びをかみしめます。それは演奏者にとっては非常に大切な糧です。札響くらぶの皆さんはそれを会場以外でもして下さっているのですから、大変感謝しております。

―― ありがとうございました。

（佐藤良次）

追悼　直純さん

札響の草創期から札響に関わり、札響の成長を見つめ、最も多く札響を指揮された作曲家・指揮者の山本直純さんが、去る６月18日急性心不全のため69歳で逝去されました。

国民的人気を博され、クラシック音楽愛好者の底辺拡大に多大な貢献をされた一生でもありました。音楽関係者の皆さんには“直純さん”と親しみを込めて呼ばれ、札響の成長に目を細められ、札響くらぶの活動にも深い理解を寄せて下さった“直純さん”を偲ぶ言葉を特集します。

直純さんの思い出

土田　英順

演奏旅行中のある日、楽譜を手にした直純さんが「息子の祐ノ介がこれを奏く事になった。問題がないかチェックしてくれ」と言う。見ると、直純さんの自作品と、皇后美智子陛下の詩に正美夫人が作曲した「ねむの木の子守歌」など数曲を、チェロとピアノのために編曲したもので、その中にはチェロの高度な演奏技術を駆使したものもあり、直純さんがチェロ奏法に関するあらゆる事を熟知しているのを知り驚かされた。

そして、いずれの作品もこの楽器の魅力を生かした見事な編曲で、そのすばらしさを伝えると「ほんとかあ、おまえ！ これをおまえにやるから北海道でひろめてくれ」と、光栄にもその楽譜を拝受する事となった。

あれから七年。安易に奏く事で、作品の価値が損なわれるのを恐れ躊躇していたが、今年になって、ようやく各地で披露することができた。

いつの日か、天国で再会したら、寅さんの「男はつらいよ」などを多くの人に聴いてもらい、ウケにウケた事を報告するつもりだ。

きっと、あの時のような満面の笑みで「ほんとかあ、おまえ！」と喜ぶに違いない。

（前札響チェロ首席奏者）

直純さんの思い出

一戸　哲

直純さんの指揮で夕張に行ったとき、直純さんのアレンジによるアンコール・ピースで「赤とんぼ」「七つの子」「故郷」を一つに纏めた曲を演奏しましたが、客席の最前列でオーケストラと一緒に歌っていた子どもの嬉しそうな顔、その隣で目にいっぱい涙をためて歌っていたお祖母さんとおぼしき人の顔が、忘れられない思い出となっています。

それにしても、直純さんは、ソロのパートを立たせる人でした。以前は練習中に「ここ本番では立って」「はい」というやりとりがあったのですが、数年前の演奏会当日のリハーサルの後、楽屋に呼ばれ「お前、夕べ付き合わなかったからお仕置き。ここの所はたって吹け。関係している所は、全員立って吹くように言っておけ」というやり取りの結果、木管楽器全員が立って演奏するはめになったことがありました。

本年５月29日の名曲コンサートのおり、クラリネットの多賀君が、リストの「ハンガリーラプソディー」で、随分長いソロを吹いたのを覚えている方がいることと思いますが、前日の旭川の演奏会の本番でいきなり始まったことで、後で聞いたら、リハーサルの後で直純さんに呼ばれ、１分間の間何かやれと言われて始めたとのこと。29日の本番では何が始まるのか、皆、興味津々でその時を待っておりました。

今を去ること20余年前、「オーケストラがやって来た」の演奏会でご一緒した時、演奏会当日、苫小牧市民会館の楽屋に入ったおり、「もりしょう」こと、森正さんとばったり出くわし、「どうなさったのですか」と聞いたところ「あいつ怪我したから代わりに指揮してくれと連絡貰ったから、朝一で飛んで来たんだよ」とのこと。実は前日、直純さんは足を怪我して、とてもステージに立てる状態では有りませんでした。その頃から、練習の後一度は訪れていた盤渓のそば屋「高畑商店」に、今年５月の練習後、今回は疲れたからそば屋は無し、その代わり薄野の馴染みの「石松寿司」に集合が掛かりました。健康がすぐれないのではないかと、些か気懸かりでは有りましたが、その時、機嫌良さそうに現れた姿に多少は安心致しました。

まさか、５月の演奏会が最後になるとは。

ここに、謹んで直純さんのご冥福を祈ります。

（札響ファゴット奏者）

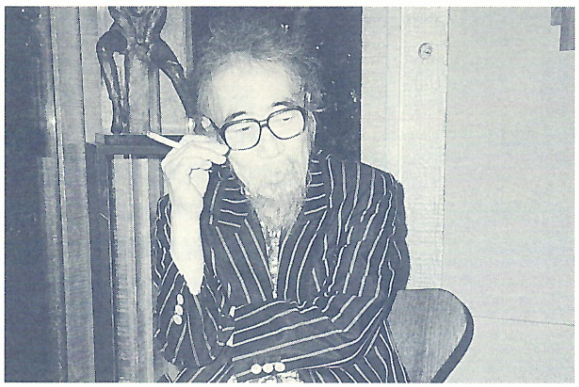
山本直純さんの思い出

河邊　俊和

山本直純さんの訃報に接した時、私達は6月の定期演奏会のリハーサルの最中でした。5月27日から29日まで、旭川と札幌の演奏会でご一緒したばかりでした。

最近、体調を崩されたことは存じていましたが、こんなに早く逝ってしまわれるとは思いませんでした。

直純さんは、私の母校の客員指揮者でもありましたので、学生の頃から何度もお目にかかりました。よくご自分の作曲されたシンフォニック・バラードや大河ドラマのテーマ音楽を、習志野文化センターや埼玉の越谷で演奏したものです。



直純さんは、スタンドプレー（立っての演奏）がお好きで、金管楽器でのファンファーレや大事なテーマの時によくスタンドプレーを要求されました。

そうした独特のセンスで音楽を盛り上げる一方、時にはユーモラスな感覚をちりばめて、お客様を喜ばせる高度な技も披露されていました。お客様に喜んでいただくために、あらゆる努力を惜しまなかった指揮者でした。

直純さんが最後の指揮をとられたのは、私たちのオーケストラでした。あまりにも早すぎたお別れと申すほかありません。

直純さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（札響第2ヴァイオリン首席奏者）

幻の札響くらぶ顧問　～山本直純さんを偲んで～

上田　文雄

山本直純さんと最初で最後にお目にかかりお話させていただいたのは、去る5月29日、札響名曲シリーズ終演後のキタラ大ホール指揮者室であった。その日、コンサートの直前に開催された札響くらぶ総会で、竹津さんから「山本直純さんに札響くらぶの話をしたら大変関心を示され、顧問でも何でも引き受けてあげる、というお話であった」との情報をいただき、総会の了解のもとに私がご挨拶にお伺いしたのであった。

指揮者室のソファーに深々と腰を落とされた山本さんは、この日のステージも演奏曲目の半分ほど指揮を代わられるほどの健康状態で、相当にお疲れのご様子であった。十分なお話はできなかったけれど「竹津さんから話は聞いているよ。札響くらぶの役に立つなら何でもやってあげるから、必要な時にマネージャーに連絡して」と話された。私は、「お体を大切になさって下さい。顧問ご就任等、後日必ずお願いにまいります」と申し上げて指揮者室を後にした。

くらぶ事務局にそのことを報告すると、皆大喜びで、これからのくらぶ運営への助言等をいただけることへの期待は、いやが上にも高まったのは当然である。

それから20日も経たないうちに、私たちは山本さんの訃報に接することとなった。同時に、札響くらぶ顧問山本直純さんは幻となった。札響を応援する私たちの活動に、きっと多くの知恵と力を与えてくれたに違いない。本当に、残念なことであった。

山本さんといえば、あの独特の風貌とともに、親しみやすい語り口で、クラシック音楽の大衆化に努められた生涯であったと評価されている。私たちも「オーケストラがやって来た」等によって、多くの音楽の楽しみ方を教えていただいた。あの日のコンサートでのお話もそうだった。ウェーバーもシューベルトもリストも、山本さんが語れば、みんな友達という不思議な雰囲気になるのだ。肩から力を抜いて、普段着で音楽を聴くことができる。

「オーケストラがやって来た」というネーミングも私は気にいっている。北海道における札響の役割を表しているような気がするからだ。広い北海道で活動する札響が、山本さんが追求してこられた「人々に音楽を運び、伝え、広める」活動理念を持つことができれば、どんなにすばらしいことか。

私たち札響くらぶは、山本直純さんがやってこられたことに共感をもって、札響を応援する活動をしていきたいと思っている。それが山本さんの遺志でもあったと思うし、天国から暖かく見守っていて下さると思うから。

幻の札響くらぶ顧問山本直純さんの遺徳を偲びながら。

（札響くらぶ会長）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　フルート副首席奏者

高橋（たかはし） 聖純（せいじゅん）さん

音楽との出会いからお聞かせ下さい

両親共に音大の卒業でして、もう、生まれた時から音楽の中で育ちました。特に小さい時から楽器を習っていた訳でもなく、野球やサッカーをして遊んでいましたが、周りに音楽があるのは当たり前という感じでした。

フルートを志されたきっかけは

小学校の時からお祭のお囃子で篠笛を吹いていましたし、リコーダーもそこそこ上手でした。とにかく笛が好きだったのですね。高校の入学式の時に、ブラバンの演奏がありまして、その時に女子生徒のフルートのソロの部分があり、それを聴いて文字通りコロッとまいりました。瞬間的にブラスバンドに入ろうと思いました。

専門にやろうと思ったのは　いつ頃ですか

高1の1月です。それまでに音大に行こうと決めていましたが、ブラスバンドでは体が大きいのでバリトン・サックスをやらされていました。それがいやでなんとかフルートがやりたくて、音大を受けるのでフルートをやらせてくれるように頼んだら、認めてもらえたのです。その時から、プロになろうと思うようになりました。

札響入団までの経歴を

93年に国立音大に入学しました。97年になんとか首席で卒業させていただき、プロとして活動したいと思ってはいましたが、はっきりしたものはありませんでした。2年くらいの間、東京でコンクールを受けたり、エキストラをしたりしていましたが、以前からドイツで勉強したいという気持ちが強く、99年にシュトゥツガルトの音大に留学しました。大学院みたいなもので4学期ありまして、1・2学期の頃から東京や広島などのオケからオーデションの話がありましたが、その気になれずにお断りしていました。ところが、一緒に学んでいた仲間に一流オケの現役プレーヤーがたくさんいて、彼等に刺激を受けて、3学期の頃にはオケでやってみようかという気持ちに傾いていました。たまたまそんな時に、ある人から、札響のオーディションを受けてみないかという連絡があり、入団させていただくことになりました。

札響はどうでしたか

超最高です。とにかく環境とまわりの人たちが素晴らしいと思いました。立派な練習場、素晴らしいホール、恵まれたオケだと思いました。初めて入団したオケで、経験も浅いですから、オケのレベルなんてよく分かりませんが、すごい演奏をするオケだな、と時々感じさせられています。

札幌での生活はいかがですか

とにかく気にいっています。暑さが苦手なので、気候がいい。ちょっと郊外に行けば、至る所に大自然が広がる。それでいて大都市で、何の生活上の不便もない。本当に素晴らしいと思います。また、札響は道内旅行が多く、私にはとても魅力的です。松前と釧路で食べた寿司など、超最高でした。

将来の夢をお聞かせ下さい

世界中の様々な所で小さなコンサートをやれればと思います。聴衆と直接息が通い合うような演奏はぼくの喜びです。去年、英国公演の後、楽団は帰国したのですが、僕は少しの間英国に残りました。その時に、スコットランドの小さな町の、小さな教会でコンサートをやりましたが、本当に嬉しく超貴重な体験でした。

これからの札響に期待することは

様々な国へのツァーの機会が多ければと願っています。様々な生活や文化に触れることが、音楽にも大きな刺激になります。去年の英国公演で、とっても強くそう思いました。

（佐藤昇子　佐藤紀子　西野留理子）

札幌交響楽団　チェロ奏者

坂（ばん）　菜々子（ななこ）さん

チェロを始められたきっかけは

祖父が昔、N響でオーボエをやっていて、小学校の時は祖父にオーボエを習っていました。祖父はとても厳しい人で、本当に怖かった。放課後、友達と遊んでいる時に祖父がやってきて、急にレッスンが始まり、４時間位立ちっぱなしで最後はフラフラということがよくありました。中学１年の時「（祖父から逃れるために）じゃ、楽器を変えよう！」という感じで、たまたま父がチェロが好きで勧めてくれたこともあって、始めたのがきっかけです。（ちなみにお父様は武蔵野音大の作曲の先生、お母様はピアノの先生という音楽一家です）

リスト音楽院へ留学されたそうですが

言葉が大変でした。スーパーなんかでは、ハンガリー語しか通じないので、お肉を買うのも一苦労でした。２年間留学していましたが、やはり外国で暮らしたのはすごく貴重な体験でした。ハンガリー人の生活や習慣は、暮らしてみないと分からないこともたくさんあると思います。言葉は本当に苦労しましたが、それでも一生懸命に伝えようと身振り手振りで話していると、意外に通じたりしましたよ。うまくいかなくて、落ち込んだりしたこともありましたが、今考えると日本にいたら感じることができなかったこともあるし、そういう生活をする中で感じるいろんなことが、音楽にもつながってくるのではと思います。

電車の旅がけっこう好きで、ウィーンには電車でよく遊びに行きました。３時間半で行けるので、一度日帰りのつもりで遊びに行ったら、帰りの電車を間違えてパリ行きの電車に乗ってしまい、途中で降りたのですが結局ハンガリーには戻れず……でも、次の日はレッスンだったので、朝一の電車でハンガリーに戻ってレッスンに行きました。先生にそのことを話したら「パリで遊んできたらよかったのに」と大笑いされました。いろいろな珍事件はありましたが、楽しい留学生活でした。

札響入団のいきさつは

留学している時にオーケストラに入りたいと思っていたのですが、たまたま以前からの知り合いで既に札響にいた角野友則さん（チェロ）が、札響のオーディションがあることをメールで教えてくれました。そのオーディションの時に、初めて北海道に来ましたが、それまで札響を聴いたことはありませんでしたし、札響の人たちにもその時初めて会いました。すごいプレッシャーの中でのオーディションだったので、「受かりました」と連絡を受けた時は、「本当ですか？」と何度も言ってしまうくらいとても嬉しかったですね。

北海道の冬はいかがでしたか

今年は雪が少なかったようですが、それでもいっぺんに雪が降るのを見たことがなかったので嬉しかったです。でも、歩くのが大変。特に、チェロを持って歩くのが結構大変でした。一度、チェロを背負っていて、ステーンと転んでチェロの下敷きになったことがありました。（チェロを体で守ったのはさすが！）

運転免許もこちらに来てから取ったので、雪道を生まれて初めて運転したのですが、すごく怖かったですね。雪が降ると、道が何車線なのか分からなくて、春に雪が解けて初めて「ああ、ここは３車線だったんだ…」という所がいっぱいあって、驚きの連続でした。

何か趣味はお持ちですか

写真をやってみたいと思っています。一眼レフが欲しいなあ。

北海道の夏とかとてもきれいじゃないですか。ぜひ撮ってみたいと思っているんですよ。

札響くらぶについて一言

最初は「札響くらぶって何だろう」と思いましたが、交流会に参加してみて、こういうのはすごくいいなあと感じました。お客様と直接話をする機会は少ないですから、私たちにとってもありがたいことだと思います。くらぶの発展をお祈りします。私も一生懸命やりますので、宜しくお願いします。

（佐藤慶一　石川政治　細川馨）

from 「札響くらぶ」

練習見学会　～今年は２回実施～

毎年、秋に実施してきました札響の練習見学会が、今年は札響事務局と指揮者の尾高さんのご理解により、２回実施されました。

９月と10月の定期演奏会の練習で、１回目は９月８日(日)、２回目は10月５日（土）に、いずれも芸術の森アートホールで行なわれました。都合に合わせてどちらか１回か両方に参加できるということで、申し込みも１回目84人、２回目95人の多数でした。

１回目の９月８日には、申し込みよりも若干少なめでしたが、熱心な会員が集まり、約１時間の熱の入った練習を見学しました。

９月から12月までの４回の定期演奏会と、12月の「札響の第９」の５回の演奏会で、ベートーヴェンの全交響曲を演奏するという、尾高さんにとって初の「ベートーヴェン・チクルス」の初回の練習とあって、演奏する側にも熱気が感じられましたが、見学した会員の皆さんは、プロの集中力とテクニックに改めて圧倒されたようで、見学会終了後は、皆さん満足の表情を浮かべていらっしゃいました。

札響の新CDは世界スタンダードナンバー

９月の定期演奏会のプログラムで、札響のCDレコーディングが紹介されました。

このCDは、千歳の㈱ダイナックスが、創業30周年の記念品として世界中の顧客に配布するために制作するものだそうです。そのため、本来ならば、一般の人々には手に入らないものということになりますが、同社が長年企業メセナとして札響を支援してきたといういきさつから、札響がそのCDを自由に販売してもよいという意向が示されたそうです。

山下一史さん指揮、ソプラノ石田雪子さんで、「星に願いを」「明日に架ける橋」「アメイジング・グレイス」などの札響としては初のスタンダードナンバーが収められているそうです。

年内には発売されるそうですので、ご期待下さい。

編集後記

今号は、山本直純さんの追悼号としました。直純さんは、札響の出発の頃から、ある時は下指揮に、ある時はトレーナーに、またある時はステージ上の指揮者として、「札響指揮者」としての肩書はお持ちになられませんでしたが、札響とは切っても切れない深いご関係でいらっしゃった方でした。

2000年９月１日、「札響くらぶ」第14号で直純さんに「指揮者に聞く」のコーナーにご登場いただくため、芸術の森の入口前の喫茶店「フェルマータ」でインタビューさせていただきました。同店のハーブ・ティーがことのほかお気に入りで、約１時間、楽しくお話をうかがいました。

「天衣無縫の天才」というのが私の印象でした。この人のどこからあんな素晴らしいメロディーが生まれてくるのだろう、と不思議でなりませんでした。「話を戻しますが」という私に「ああ、そうして、オレ自分でも話がどこ行くか分からないから」とおっしゃり、「自分の作品を忘れるのは、作曲家にとってとても大事な才能なんだ。それが出来なきゃいい作品は生み出せない」とおっしゃった言葉が今でも強い印象として残っています。　（佐藤良次）

「札響くらぶ」を無駄にせず、読み終ったらお知り合いへ。

次号の「札響くらぶ」は１月発行の予定です。